

## (1)築城時期

七尾城は能登畠山氏の居城で、能登の政治、文化の拠点として機能しました。築城時期は明確ではありませんが、各地の有力大名がその拠点を山城に移す16世紀前半頃には能登畠山氏も遅れることなく、七尾城を築き支配体制を固めたと考えられます。

府中の守護所（現在の市街地付近）の南西約4kmの石動山系の要害に「七尾城」、その麓に城下町「七尾」を築いて、山上山下が一体となる新しい拠点を形成し、一元的な大名支配を目指しました。こうした能登畠山氏の拠点の移動は、守護大名から戦国大名への変貌を遂げようとした能登畠山氏の変革を物語りものとして位置づけられます。

## (2)戦国時代中頃の七尾城と城下町の様子

禅僧の<sup>ほうしゅくしゅせん</sup>彭叔守仙（東福寺の前住持）が天文13年（1544）3月に筆録した『<sup>ゆうじょさくむしゅう</sup>猶如昨夢集』所収の<sup>どくらくていき</sup>「独楽亭記」に、当時の七尾城と城下町七尾の様子が描かれています。（彭叔守仙は、天文9年（1540）・10年・16年に温井総貞に招かれて能登へ訪れています。）

安定した領国支配を執った7代義総の頃には、山上を<sup>てんきゅう</sup>「天宮」、城下を<sup>さんしせいらん</sup>「山市晴嵐」と『独楽亭記』に記されているような繁栄した七尾城下が形成されたようです。

### ①戦国巨大山城「七尾城」

麓から眺めた七尾城を、<sup>たいしゅ</sup>太守（7代義総）の御殿は鳥が翼を張り広げたように建っていて、その建物には華やかに朱や藍が塗り重ねられていることから、まるで空や雲に<sup>はしご</sup>梯子を架けたようだと記しています。能登畠山氏の御殿や家臣団の館が立ち並び、まさに七尾城は戦国の巨大山城だったと想像されます。

### ②「千門万戸」の城下町「七尾」

七尾城の麓の城下町・七尾から港付近の能登府中まで、家並みは一里（約4km）余り続き、その様子は「千門万戸」とたたえられています。さらに、その町中でいろいろな品物が売られ、多くの人々が行き交い、とても賑やかだと記され

ています。このような屋敷の痕跡や焼物などの生活用具が、発掘調査で発見されています。

### (3) 上杉謙信の能登侵攻と七尾城落城

戦国時代末期には、内乱で能登畠山氏の権威が失墜し、実権は、重臣の長綱連・遊佐続光・温井景隆の三氏が主導権を争っていました。

上洛をめざし、越中を制圧した上杉謙信は、天正4年（1576）11月に能登へ侵攻、能登の諸城を次々と攻略し七尾城に迫りました。難攻不落を誇る七尾城の攻略は容易ではなく、翌年3月まで滞在しましたが、関東の政情不安により謙信はいったん、越後へ戻りました。同5年（1577）閏7月に再び七尾城を囲み、重臣の遊佐続光の内応によって、天正5年（1577）9月に落城しました。

上杉謙信は9月17日に能登南部の末守（森）城を攻略して加賀に向かい、23日に手取川で柴田勝家ら織田軍に大勝しました。七尾に戻り、七尾城の修築を指示しようと登城した謙信は、その絶景に感嘆しました。そのときの情景が書状に記されています。

「聞きしに勝る名地で、（加）賀・越（中）・能（登）の要の地形といい、要害は山海相応し、海や島々の風情も、絵にも書けない景勝である。天険の要害なので、普請も短期間で済むであろう。」

（上杉謙信書状「歴代古案」第一）